

## 2015 合同教研 テーマ討論③「インクルーシブな教育の教育づくりの方向性」

3つの柱①障害のある子どもの生活、発達をどのように保障していくか、②障害のある、なしにかかわらず、特別なニーズを持つ子どもの支援のあり方について、③高校、特別支援学校高等部で学んだ後の青年期を、社会へどうつなげていくかという視点について討論しました。

パネラーからの報告、山本仁史（北見市立西小学校）さんはインクルーシブな環境作りとして子どもどうしがつながりあえる授業づくりの大切さ、インクルーシブ教育を視点においた校内研修により教職員の意識が変わってきたこと、子どもたちが過ごしやすい環境作りが求められていることを報告されました。

池田孝司さん（奈井江商業高校）は人権（学習権等）の観点からどのような教育内容を保障すべきか問い続けることの大切さ、このことに関して教職員向け便りの発行や関西の高校で特別支援教育を教育課程に位置づけていることの紹介を含めて報告されました。

菊池信二さん（幕別高校）は、中学校特別支援学級在籍生徒の半数が通常高校への進学希望と言う十勝の特殊性を紹介。日常の授業では、タブレットを活用するなど、生徒の認知特性を考慮した取り組みのほか、人の話を聞く、相手に伝える、意見をぶつけ合う、質問するといった生徒同士の学びあいの様子を報告されました。また、個別の生徒が持つ困難や弱さを前提とした指導や教育の工夫を多くの教員は必要と捉えるようになったが、教師、学校の意識改革が、なお必要であることも述べていました。

三田村祐二さん（新篠津高等養護学校）は、特別支援学校高等部のあり方が報告されたことを踏まえ、何をどのように、どこで学ぶかについて、ますます問われていくこと、とりわけ今後多様な形態となる特別支援学校高等部など受け入れる側のあり方について、しっかりと考えていく必要があることを報告されました。

発言も含めた討論を通して、学びのあり方や学びを通じた他者とのつながりが深まることにより、成長、発達が促されて行くことが改めてとらえられました。

まとめでは、授業が子どもたちを包摂していくことがインクルーシブにつながること、集団の中で子どもたちがどう学び、育ちあっていくのかが問われている事、特別支援教育からさえも漏れている子どもはいないのか、一人ひとりを受け止めていく実践の追及が必要であること、インクルーシブな教育作りの方向性についてさらに検討を深めていくことが大切であることを参加者でおさえあいました。